

## 仏教と耶蘇教の区別

青木稔弥

『雅楽多集』という一九〇六年（明治三九）二月十三日に発行された一冊の本がある。印刷所は横浜の横山印刷所だが、著者兼発行者の島田軍吉の現住所は「北米合衆国布哇県ホノルル府リヴァー町」で、ハワイにいる開拓移民の日本人向けに書かれたものであった。「我楽多集緒言」に以下のようにある。

当布哇は無味乾燥の地にして精神の娯楽に供すべきもの太だ尠し 中に就てホノルルの如きは全島の首府と云ひ不完全ながらも有形無形に通じて聊か是等の設備なきに非れども各島耕地に至りては皆無の有様にて同胞の諸子が朝に星を戴て出て夕に四点半の汽笛に接し勿々菜籠を担ひ各々キャンプに帰り服を脱し洗湯に入り塵埃を去りて終日の労を休め食卓に向ひ一盞を傾けて快哉を叫ぶと雖も其は肉体上の事に属す 若し夫れ靈界の安慰に至りては絶無と云ふも誣言に非ざるが如し 医聖ヒポクラテス曰く身体健康ならざれば

精神健康ならずと 余は言ふ精神健康

ならざれば身体健康ならずと 身心本来不二なれども且つ仮に本末を言はゞ心は是れ本にして身は是れ末なり 然れば則ち精神健康なりてこそ身体健康なりと謂ふべし 是を以て余は同胞六万の精神の健全を図らんが為め茲に珍談奇聞を戯述し以て諸子が靈界の娯楽に供せんとす 読者夫れ焉を諒せよ



『雅楽多集』の表紙

「日露戦争阿房多羅経第一」の章に始まり、「仏教と耶蘇教の区別」の章に終わる全五十四章の構成である。「附言」に「本書は諸子百家の書より摘出したるもの多し」という通り、「列子」「楞嚴経」「百喻経」「報応録」「呂氏春秋」「抱朴子」「淮南子」「孔子家語」「韓非子」などに取材した中国物が多いが、「阿房多羅経」以外にも「千代萩の作り替へ」「<sup>オツペケペー</sup>欧米化節」「太功記さわり作り替へ」を作り、「古今著聞集」「一休禅師の墨跡」を利用し、「佐倉宗五郎」「頼山陽」を登場させるなど、日本物も決して少なくはない。それに対し、西洋物は、「スマイルス自助論にアルチールニカパイルと称する一種の土人あり」に始まる「食欲の為に猿身を滅ぼす」の章、イソップ物語に取材した「蟹の横匍ひ」と「鼠の会議」の章の計三章しかない。その「鼠の会議」の章にしても「忠太郎」「尾長引之助」「<sup>としよりねずみ</sup>老鼠忠左エ門」が登場し、「俗耳に<sup>じ</sup>入り易き」ように日本的に「脚色」されている。

このような偏りが生じたのは、「君子の学小人の学」の章の末尾が「<sup>い</sup>咄偽善伝道師よ猛省一番悔い改めて小人の学を去り君子の学に就けと云<sup>しかいふ</sup>爾」とあるように、「偽善伝道師」ひいては「耶蘇の伝道師」に対する反感が強かったことにあるようで、巻尾の「仏教と耶蘇教の区別」の章では、甚だしく、耶蘇教の分が悪い。仏教と耶蘇教、および、釈迦とキリストを客観的に比較しているように見せながら、後者に対する悪意が仄見え、結局は「ヤソの神なるものは架空の説にして蜃気楼と同一のものなれば取るに足らざるなり」とするのである。仏教は「<sup>むじ</sup>円融無礙の<sup>しん</sup>教」だが、「ヤソ教は」「人の自由を束縛する」「貴族主義」の「<sup>まごまご</sup>妄想宗教」である。また、「釈迦は三知を具」し、「身は貴族より起りて一切衆生悉有<sup>いつくさいしんじやうしんづつふつしやう</sup>仏性と唱へて平民主義を<sup>むすぶ</sup>鼓吹」したのに対し、キリストは「其説法真理の原則に乖く故に三知なし」で、「父なくして母マリヤのみに依りて生る之れ<sup>まごまご</sup>姦通の子にあらざるかと人皆疑」い、「妻なし子なし人情を解せず」との否定的評価を下される存在でしかない。

「抑も日本は、神武天皇、建国以来三千年だよ、皇統連綿、今も昔も変らぬ国体、常盤の松だよ」(「日露戦争阿房多羅経第一」)や「日本の国粹を破壊して<sup>えぞり</sup>妄に欧米を慕ひ遂に有形無形共に欧米に化するが故に此弊を矯めんとして<sup>オツペケペー</sup>欧米化節始れり」(「オツペケペー 第一」)との認識が極端すぎるのは贅言するまでもないことだが、日本を遠く離れたホノルルの地からの発信で、その主たる読者がホノルル以外の僻地にいる欧米化からほど遠いハワイの日本人ということであることを考えれば、自らの存在意義を確かめるためのより一層の日本化というのは自然なことであるかもしれない。

二十世紀初期の異文化交流の一コマ(もしくは、異文化交流に失敗した国粹主義者の世迷い言)である。